

『源氏物語』 「総角」 卷の哀悼表現について — 釈迦涅槃の表現を中心に —

日本女子大学大学院 博士後期課程二年 沖 奈保子

『源氏物語』の女主人公の一人である大君は、唯一の心の残りであった妹中の君の後見を薫に託し雪の降る夜に息を引き取る。薫の求愛を拒否し続けた大君は、愛に応えて生きることよりも頑ななまでに自らの体面を保持し、生き恥をさらすよりも高潔な死を選択した女性であった。本稿はそうした大君の死と哀悼の場において今まで論じられてきたことを確認した上で、新たな表現の可能性について提示するものである。

一、 紫の上の死と哀悼の場面との類似について

今西氏が、「桐壺巻の帝から宇治十帖の薫まで『源氏物語』は「死なれた者の物語」としての一貫性をもつ」と述べられるように、桐壺更衣にはじまり、浮舟に至るまで男主人公からの愛情を受け女たちはその愛に十分に応えることなく次々と物語から退場する。まるでこの世から去ることが女主人公となるための条件とさえいえる。「限りあらむ道にも後れ先立たじ」²との桐壺帝の言葉に、「かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり」と生きることが切望した桐壺更衣をはじめ、当初死の場面において、両者の心の通い合った姿が描かれた。源氏の正妻葵の上の最期の場面「常よりは目とどめて見だして臥したまへり」³と源氏をみつめるまなざしに、

冷え切った夫婦間の心の氷解がみられたように、死に行く者と残される者の両者には、愛情の疎通が前提とされていた。しかし、柏木が「強ひてかけ離れなむ」⁴と自ら死を招き入れた辺りから、物語内での変容がみられる。愛という、実に寄る辺のないものを前にして、いかに生きるかより、いかに死ぬべきかに重点がおかれるようになる。

しばしにても後れきこえたまはむことをばいみじかるべく思し、みづからの御心地には、この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちにかけとどめまほしき御命とも思されぬを、年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心の中にもものあはれに思されける。
(御法④四九三)

紫の上は残された源氏の気持ちを使うと「ものあはれ」に思うのだが、だからといって積極的に生きることが望んでいない。「あながちにかけとどめまほしき御命とも思されぬ」という心情からは、「いかまほしきは命なりけり」と辞世歌を絶唱した桐壺更衣の姿を求めるところはできない。葵の上、藤壺が、源氏への愛を確認し息を引き取ったのに対し、紫の上はむしろ哀憐の情を抱き、最期は明石の中宮に看取られこの世を去る。そして、紫の上の感慨は、積極的な意

志をもった形となつて大君へと引き継がれる。ほんのわずかでもい
いから生き長らえてほしいと祈りにも似た薫の看病を受け入れつつ
も、大君は、「かうおろかならず見ゆる心ばへの、見劣りして我も
人も見えむが、心やすからずうかるべきこと」と思い、死の直前ま
で拒否の姿勢を崩すことはなく、この折に、「いかで亡せなむ」と
死ぬことを願うのである。

愛を受け入れながらもゆるやかに死路へと向かう紫の上、そして
愛の情けを知りながらも拒否し死を希求する大君。この二人の女性
は、死とその前後の場面が共通の表現をもつて語られることがす
でに知られている。久富原玲氏の指摘にあるように、大君の死期を
前に、「豊明は今日ぞかしと、京思ひやりたまふ」と語られるとき、
読者は幻巻の一連の哀傷歌群の中にある源氏の独詠歌を想起する。

宮人は豊の明にいそぐ今日ひかげも知らで暮らしつるかな

(幻⑤五四六)

幻巻はこの歌を最後に勅撰歌集的な月次の哀傷を終える。悲嘆に
暮れた一年に、紫の上の反故を焼くという作業をもつて慕情を断ち
切り、悲哀の、ひいては源氏の一生の閉じ目とする。しかし、一旦
収束をみせた源氏の哀傷は、豊明節会の場面とともに再び物語の表
面にあらわれ、薫に引き継がれる。

かきくもり日かげも見えぬ奥山に心をくらすころにもあるかな

(総角⑤三二五)

豊明節会の日、宮中の華やかさとは逆に、暗黒の闇が広がり、眼

やがて、その日、とかくをさめたてま
つる。限りありけることなれば、骸を
見つつもえ過ぐしたまをまじかりけ
るぞ、心憂き世の中なりける。…限
りなくいかめしき作法なれど、いとほ
かなき煙にてはかなくのぼりたまひ
ぬるも、例のことなれどあへなくいみ
じ。空を歩む心地して、人かかりてぞ
おはしましけるを…(御法④五一〇)

世の中思しつづくるにいと厭は
しくいみじければ…かかる悲しさの
まぎれに、昔よりの御本意も遂げてま
ほしく思ほせど(御法④五一二)

いとど思ひのどめむ方なくのみあれ
ば、云ふかひなくて、ひたぶるに煙に
だになしはててむと思ほして、とかく
例の作法どもするぞ、あさましける。
空を歩むやうに漂ひつつ、限りのあり
さまさへはかなげにて、煙も多くむす
ばほれたまはずなりぬるもあへなし
と、あきれて帰りたまひぬ。

(総角⑤三二九～三三〇)

かく世のいと心憂くおぼゆるついでに、
本意遂げんと思はるれど、

(総角⑥三三〇)

これらの一種焼き直しともいえる類似は、物語の根幹を流れる通
奏低音となつていよう。紫の上の死によつて源氏が人生の終焉を迎
えた一方、薫は死と葬送の場面描写の類似という方法で源氏と同次
元に立たされる。ここで注意しておきたいのは、「御法」「幻」両巻
と、「総角」巻の表現の類似は、あくまで主題の連関を意味するもの
であつて、表現そのものの簡略・貧弱化、または二番煎じなわけ
があるまい。というのも、続く哀傷の場面では、類似表現と指摘でき

前には楽の音ではなく雪が吹き荒ぶ。とめどもなく降り続く雪の下
に、薫の手ずからの看病を抗う力もないほどに衰弱した大君が横た
わっている。確実に死路へと向かつている大君を前に絶望的な薫の
気持ちが歌に託される。かつて豊明節会で徐々に沈静下された物語
内の負の磁場が、時を隔て人物を変化させながら、共通の場の提示
によつて同様の悲劇が発生するのではないかという予感が読み手の
脳裏によぎる。その予感、紫の上の死と大君の死の酷似によつて
決定的なものになる。

まことに消えゆく露の心地して限
りに見えたまへば…明けはつるほ
どに消えはてたまひぬ。

(御法④五〇六)

大殿油を近くかかげて見たてまつ
りたまふに、飽かずうつくしげにめ
でたうきよらに見ゆる御顔のあた
らしさに、…「かく何こともまだ
変らぬ気色ながら、限りのさまはし
るかりけるこそ」とて…御髪
ただうつやられたまへるほど、こち
たくけつらにて、つゆばかり乱れた
るけしきもなう、つやつやとうつく
しげなるさまぞ限りなき。…な
のめだにあらず、たぐひなきを見た
てまつるに、(御法④五〇九)

大殿油を近うかかげて見たてまつりた
まふに、隠したまふ顔も、ただ寝たまへ
るやうにて、変りたまへるところもなく
うつくしげに臥したまへるを、…御髪
をかきやるに、さとうち句ひたる、ただ
ありしながらの句ひなつかしうかうば
しきも、ありがたう、何ことにてこの人
をすこしものめなりしと思ひさまな
む…(総角⑥三二九)

るものは先にあげた薫の「かきくもり」の独詠歌だけであり、豊明
節会を終点とし、「今年をばかくて忍び過ぐしつれば」(幻⑤五四六)
と年の暮れの独詠歌をもつて紫の上哀傷を終えた幻巻の哀傷歌群と
対照的に、豊明節会を始点として年の暮れまでの間に繰り広げられ
る大君哀傷描写は、紫の上哀傷場面ではみられない新たな表現の可
能性を示唆する場面として描かれるのである。

二、哀悼場面における「冬の月」

月次に描かれる幻巻においても、冬の代表的な景物である雪と、
源氏自身が朝顔巻で賞賛した冬の月の表現はなく、大君哀悼場面
においてこの二つが軸となつていることは、山里の宇治の景物という
枠を越えた問題として注意すべきであろう。

総角巻の巻末部にある薫の哀悼場面を引用すると、

(a) はかなくて日ごろは過ぎゆく。七日七日のことども、いと尊くせさ
せたまひつつ、愚かならず孝じたまへど、限りあれば、御衣の色の変
はらぬを、かの御かたの心寄せわきたりし人々の、いと黒く着かへた
るをほの見たまふも、

くれなぬに落つる涙もかひなきはかたみの色を染めぬなりけり
聴色の氷とけぬかと思ゆるを、いとど濡らしそへつつながめたまふ
さま、いとなまめかしくきよげなり。(総角⑥三三二)

(b) 雪のかきくらし降る日、ひねもすにながめ暮らして、世の人のすさ
まじきことに言ふなる師走の月夜の、くもりなくさしいでたるを、簾

巻きあげて見たまへば、向かひの寺の鐘の聲、枕をそばだてて、今日も暮れぬ、とかすかなる響きを聞きて、

おくれじと空ゆく月を慕ふかなつひにすむべきこの世ならねば
風のいと激しければ、蔀おろさせたまふに、四方の山の鏡と見ゆる
汀の氷、月影にいとおもしろし。京の家の限りなくとみかくも、えかうはあらぬはや、とおぼゆ。わづかに生きたいでものしたまはましかば、もろともに聞こえまし、と思ひ続くるぞ、胸よりあまるこちする。

恋ひわびて死ぬる薬のゆかしきに雪の山にやあとを消なまし

なかななる傷教へむ鬼もがな、ことつけて身も投げむ、とおぼすぞ、
心きたなき聖心なりける。(総角⑥三三三)

眼前には、一切の色彩が排除された、光の陰影のみで構成される静寂の世界が広がる。(a)の場面において「京の家の限りなくとみかくも、えかうはあらぬはや」とあるように、月に照らされた白銀の世界は、雪と喪服、白と黒とのコントラストを表し、その中で紅の涙が鮮やかな色彩をもつてきらきらと発光する。血涙は、「いと黒く着かへたる」女房たちの中で薄紅の服を身に纏う「なまめかしうきよげ」な薫そのものであり、喪服を着ることさえゆるされぬ薫の存在はモノクロの風景から浮き立つ。

また(b)の場面について、伊藤博氏、久富原玲氏によつて『竹取物語』との比較研究が細部に亘り展開されている¹⁰。紫の上、大君がかぐや姫の造型を内に秘める女性として連鎖関係にあるとする¹¹と、「月のいでたらむ夜は、見おこせたまへ」というかぐや姫の言葉は、哀傷の場において薫の独詠歌「おくれじと空ゆく月をしたふかな」の詠意と連関する。

冬の月のほうに力点があるのではないだろうか。

「冬の月」については、貫之によつて発見された「冬の夜」の実景歌をもとに¹²、河原院周辺の歌人達によつて「冬の月春の花にもおとらざりけり」と至上の美を見出された後、一条朝において新しい美の素材として定着する¹⁴。当時のいわゆる「現代的な美」の一つであったといえる。そして、物語中、源氏をして「時々について、人の心をうつすめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの身にしてみて、この世の外のことまで思ひ流れ、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ。」¹⁵と冬の月の美意識を語らしめる。これは、「すさまじきもの」の例となつていた師走の月に対する新たな美観を高らかに宣言するものであり、宇治という特殊な場所によつて効果的に実践されていよう。幻巻で為し得なかつた春秋の色とりどりの風景を超越する雪月の至高の美が大君哀悼の場面において展開されることによつて、正編の理想的な女性、紫の上と対峙する大君の美質が強調される。雪が大君の崇高さ¹⁶を、また薫の絶望¹⁷と喪失した人がいかに稀有なものであつたかを印象づけるという表現上の営為がみられよう。

さて、大君哀悼場面での冬の月は、後の平安後期の歌人に好まれ、『新古今集』において実に二十首近くもの「冬の月」歌群が詠まれるようになったのであるが、物語において、冬の月、また雪景色を前にした哀傷歌や哀悼場面はみあたらない¹⁸。宇治の雪月の風景が、状況や心情と調和すればそれだけ、以後の散文や和歌に新しい波として影響を与えたはずである。しかし、冬景色と哀傷は切り離されて享受されるのである。最も示唆的なのは先の薫の歌が『風葉集』において秋の哀傷歌としてとられていることであろう。前後の歌群とともに引用すると

先に、豊明節会を契機とし源氏の哀悼を引き継ぐものとして季節が連関すると述べたが、今一度冬の哀傷歌について考えてみたい。というのも、哀傷歌は、春または秋の場面で詠まれるのが一般的で、冬の、特に雪の哀傷歌は、『源氏物語』以前には、二例しかみられない¹⁹。また古くから、亡き妻、恋人を慕う対象は秋の月に多く、死の季節に関係なく哀傷歌は秋に詠まれるのが基本である。紫の上の哀傷歌はこれを踏襲する形となっているが、大君哀悼は冬の雪景色の月夜という極めて斬新で異例ともいふべき場面設定となっている。そこで、今しばらくこの点に注意したい。

なぜ冬の月なのか。この問題について久富木氏は、前掲論文で²⁰以下に述べられる。

彼はなぜ、「世の人のすさまじき事に言ふなる十二月の月夜」を「したふ」のであるか。それはすでに説かれているように、紫式部の、清少納言に対する対抗心のあらわれたものかもしれないが、『竹取物語』と歩みを同じくする物語の文脈は、一方で「月のいでたらむ夜は、見おこせたまへ」というかぐや姫のことを想起させる。かぐや姫のように結婚拒否してあの世に行ってしまった大君であるからこそ、薫は荒涼とした冬の月を慕わざるを得ないのではなからうか。

確かに、かぐや姫は「月のいでたらむ夜」との言葉を残したが、季節を限定したわけではない。しかし、葬送が八月十五夜である紫の上はかぐや姫と容易にイメージが重なるが、大君は、「雪の降るさまあわたたしう荒れまどふ」晩に亡くなつており、死の場面に限定するとかぐや姫との因果関係は若干希薄な気がする。それよりはむしろ、男女の情交のイメージとは異なる、孤愁の極限ともいふべき

八月十五日、三位中将のははにおくれて侍りて、一めぐりはてて出家し侍らんとて
かやが下をれの大將(六三九)

かぎりなくうかり秋のなかなばこそかつはうれしき月日なりければ

宇治のあねぎみのいみにこもりて侍りけるに、月くまなかりける夜よめる
かをる大將(六四〇)

おくれじと空行く月をしたふかなつひにすむべき世ならねば

しのぶてかよひ侍りける女の、なくなりけるあとにまかれりけるに、むしのなきければ
かばねたづぬる三のみ(六四一)
今更に心とめじと思ふ世にをしみがほなるむしのこゑかな

女の思ひ侍りけるころ、よわりゆくきりぎりすのこゑもこころひとつをとふ心ちして
月のわかれの式部卿のみ(六四二)
別れにし秋にもすまはむしの音におのがよすがの露や悲しき

六三九番歌が、八月十五夜の月を主題とする和歌で、それを引き継ぎ薫の「おくれじと」の歌。そして六四一、六四二番歌は虫の音を歌語にもつ秋歌が続く。哀傷歌における冬の「月」という新たな表現も歌だけを切り離して考えた場合、『万葉集』や『竹取物語』からの亡妻哀悼の系譜の中にくみこまれ秋歌として処理される。冬の雪月夜の景観にみる自然美は後代に積極的に取り入れられ普遍的な歌材となる一方で、雪月夜と亡き妻の哀傷はやはり特殊なものとして切り離されるのである。

三、哀悼場面における雪―釈迦涅槃の方法―

雪の哀傷歌について、先に述べたように源氏物語以前には、ほとんどその例をみることはできない。しかし、物語中¹。においては、死または哀傷歌が冬の雪の描写を伴う例として大君の他に、桐壺院、六条御息所、八の宮が挙げられ²。また、『栄花物語』では中宮定子の葬送³、道長の死と葬送の場面に雪の哀傷歌がみられる。

道長は、十二月四日に薨去。七日雪の降る中、鳥辺野で火葬される。「その日つとめてより夜まで雪いみじう降る。…雪消えあへず降りかかりたるも、さまざまにあはれに悲し。」²と雪の葬送をの中で、僧忠命が

煙絶え雪降りしける鳥辺野は鶴の林の心地こそすれ³。(③一七二)

と哀傷歌を詠む。「鶴の林」は、『大般涅槃經(北本)』序品「爾時拘尸那城娑羅樹林。其林變白猶如白鶴。」²と、釈迦入滅の際に娑羅雙樹の樹木が鶴の羽毛のように白くなったことをふまえ、「雪の白さから釈迦入滅を連想し、道長の入滅をなぞらえる」²ことをいう。道長の死に限らず、平安期において人の死が釈迦入滅に准えられる例は多く⁴。「鶴の林」は歌語としてはこの歌が初出であるが、すでに願文などではなじみの言葉であったようだ⁵。

ここで再び、大君の哀悼の場面をみると、

恋ひわびて死ぬる葉のゆかしきに雪の山にやあとを消なまし
なかばなる傷教へむ鬼もがな、こころつけて身も投げむ、とおぼすぞ、

せたらむ心地して(⑤三二六)

【死の直後】

見るままに②もの枯れゆくやうにて、消えはてたまひぬる
はいみじきわざかな。ひきとどむべき方なく、③足摺もしつべ
く、人のかたくなしと見むこともおぼえず。(中略)④今はのこ
とどもするに、御髪をかきやるに、さとうち匂ひたる、ただあ
りしながらの匂ひになつかしうかうばしいも(⑤三二八〜三二
九)

【哀傷歌】

くれなゐに落つる涙もかひなきはかたみの色を染めぬなりけり
⑤臍色の氷とけぬかど見ゆるを、いとど濡らしそへつつながめたま
ひさま、いとなまめかしくきよげなり(⑤三三二)

⑥おくれじと空ゆく月を慕ふかなつひにすむべきこの世ならねば
(⑤三三三)

さて、「遊行経」³によると、釈迦の入滅の様子は比丘によって、「譬如大樹根枝條摧折」と、枝が抜け折れてしまうことにたとえられる。残された比丘たちは「悲慟殞絶自投於地。宛轉號咷不能自勝」と、大地に身を投げ出しころげまわり号泣し自分を抑えることができず、このような悲しみを「如斬蛇宛轉迴遑」と、傷を負った蛇がぐるぐると転げ、のた打ち回るようだと述べる。「もの枯れゆくように」(傍線部②)という大君独自の死の表現は、「遊行経」のような激しさはないもののそれでも、木々が枯れていく様子に比す

心きたなき聖心なりける。(⑥三三三)

「死ぬる葉」「雪の山」に『竹取物語』との関連が指摘されるが、すでに『河海抄』において、『大般若涅槃經(南本)』²雪山童子の逸話が引用される。釈迦の前身である雪山童子がある時、羅刹が唱える「諸行無常 是生滅法」という半偈を聞き、残りの偈と引き換えに我が身を捧げようとした話である。先の道長の葬送場面にも「諸行無常の頌をば、ただ涅槃經の偈とのみこそ知りたりつれ、多くの事ども持たりたまへけるものを。うへこそ雪山童子身にもかへけめ」²とあり、この時代にはなじみの深いものであった。

道長の葬送の日の描写は奇しくも、「雪の降るさまあわたたしう荒れまどふ」夜にこの世を去った大君のそれと類似する。死と葬送の場面において釈迦入滅を准える表現が好まれ、『涅槃經』をはじめとする仏典を引用することで死にゆくものの西方浄土への往生を示し、追悼の念を表した。すでに、薄雲巻の藤壺の死が、『法華經』の序品の表現を引くものであることは知られており³。大君哀悼場面での仏教的表現は、雪山童子の例、また「おくれじと」の薫の独詠歌が西方浄土に向かった大君を慕う心情が指摘されている。その視点で俯瞰すると大君を釈迦の入滅に准え、薫を残された弟子たちとみる表現がいくつか指摘できるのではないか。このことを念頭に置き、大君の死の直前の場面からとりあげていくことにする。

【大君の死の直前の様子】

腕などもいと細うなりて、影のやうに弱げなるものから、色あひも変らず、白ううつくしげになよよとして、①白き御衣
どものなよびかなるに、衾を押しやりて、中に身もなき雛を臥

ることができよう。一方、引き止めることもできず死にゆく姿を見、「足摺り」をし、人目も気にせず悲しみをあらわにする薫の姿(傍線部③)は、釈迦の入滅を目の当たりにした比丘たちの悲しみそのものである。

また、『大般涅槃經(北本)』「序品」では、同様の場面において比丘たちの様子を「挙手捶胸悲号啼哭、支節戰動不能自持、身諸毛孔流血灑地」という。「遊行経」と似るもの⁴ここでは、悲しみのあまり体中の毛穴から血が流れ、全身が赤く染まり、その血が地面にまで流れると記す。これはまさに、紅の衣を身に纏い血涙を流す薫の姿と重なるだろう(傍線部⑤)。なぜ喪服を着用できない薫が、喪服の代わりによりによって薄紅の臍色を着たのだろうか。むろん、先例がないわけではないのだが、『涅槃經』を踏まえる表現であるとすれば、紅衣であることの意味がはっきりとする。紅の衣服は悲しみのあまり体中から流れ出た血で染まったものであり、臍色を着用することで薫の激しい悲泣の様が表現される。

また『大般涅槃經(北本)』によると釈迦は、入滅が間近にせまると、このことが末羅(マツラ)族に伝えられる。知らせを聞き人々は慟哭し、最後の教えを請い、五百枚の白い布を持って仏に会いに出かける⁵。釈迦が入滅した後、葬送の儀礼をとりしきった末羅族の人たちは仏の葬送の作法に従い、香りのよい湯で体を洗い、五百枚の織り布でつつみ、棺に納めた⁶。「いまはのことどもする」時大君は白い衣をすでに身につけている。死の直前白の衣を身に纏う大君の姿は、衣の中に肉体を埋め衾も押しつけ白い衣装につつまれている状態であった⁴(傍線部①)。そして、この世を去った大君の髪からはまだ生きているかのような在りし日の芳香が漂う(傍線部④)。「源氏物語」の中では、さまざまな女性の死の容態の美が描か

れているが、いずれも視覚から受ける描写であつて、大君の死のみが「匂ひ」の描写を持つ。大君の「匂ひ」は、「香り」ではない。釈迦が自らの体内から香を発したのではなく、その香が後からつけられた「匂ひ」であるのと同様、大君の「匂ひ」もまたそれが体内から漂う香りではなく、外的要因から付加されたものである。薫の悲嘆の有りようが、釈迦を失った比丘を意識した表現であれば、大君の死の表現に釈迦の入滅を示唆するものが点在するのは偶然とはいえない。

四、結び

釈迦は、自ら入滅の日を二月十五日であると述べたことによつて（如十五日月虧盈諸仏如来復如是³⁵）西に沈む月に西方浄土へと涅槃を遂げた釈迦を思い、薫は大君を求めようとするが、その面影を月に見る（傍線部³⁶）。冬は、一年の最果てであるとともに、新たな生命の萌芽を予感させる季節である。その季節に死を迎えた大君は、仏の涅槃に準えられ、現世での煩惱の束縛から解放され西方浄土へと向かつたことを予感させる。事実、その姿をひたすら恋焦がれる薫の前にも、また最愛の妹中の君のもとにも、大君の魂が再び戻ってくることはない。

幻巻の豊明節会からの月次の描写を引き継ぐ形として描かれる総角巻の哀悼場面は、正編では見られない新しい冬の景観美を余すことなく描き、物語から退場した大君の美質を際立たせ、死してもなおその姿を追い求める薫の在り方を肯定する。と同時に、雪が降りしきる中で、死に釈迦入滅時の沙羅双樹の白い花を比し、表面に現れる『涅槃経』の雪山童子の逸話のみならず、大君の死と哀悼場面

全体に、釈迦の涅槃と弟子達の無類の悲哀が投影される。冬という特異な場面設定は、亡妻哀悼する伝統的な表現とは趣を異にする。冬の哀悼表現は、むしろ当時の浄土志向を示唆する表現として読み取られていたのではないだろうか。だからこそ大君哀悼場面は、宇治十帖の女主人公の高潔な死を送る風趣な場面であるにも関わらず冬の亡妻哀傷歌、冬の哀傷歌が継承されることはなく、この場面が「鶴の林」という歌語をとめない法会歌、法文歌に収斂されたのだろう。源氏が豊明節会の後、紫の上の反故を焼き、自ら憂愁の一年に終止符をうち涅槃の道へと歩きだした。一方、源氏の悲しみを担われ薫は、悲しみの果てに大君の幻影を中の君に求め、ついに形代を手に入れる。求道者薫の、煩惱からの得脱はまだ遠い先のことである。

- 1 今西祐一郎氏「哀傷と死」『源氏物語覚書』岩波書店 一九九八年
- 2 新編日本古典文学全集（小学館）第一巻「桐壺」巻二十三ページ以下、本文の引用は全て新編全集により、○内の数字で巻数を、漢数字はページ数を表す。
- 3 「葵」巻四五ページ。
- 4 「柏木」巻四二八九ページ。
- 5 今西氏は先の論文の中で、第二部以降「死にゆく者の内面への関心」がおこり、宇治十帖では哀傷の叙述以上に死に向かう者の内面を描く傾向が顕著にあらわれると指摘される。
- 6 「総角」巻三三三三ページ。
- 7 岡崎義恵氏「死をめぐる美」『源氏物語の美』宝文館 一九六〇年
- 8 久富木原玲氏「天界を恋うる姫君たち」大君、浮舟物語と竹取物語『源氏物語 歌と呪性』若草書房 一九九七年
- 9 清水婦久子氏「物語の構想と自然」『源氏物語の風景と和歌』和泉書院 一九九七年

10 注5参照。伊藤博氏「死なぬ葉・死ぬる葉」竹取と源氏」『国語と国文学』六四・三 一九八七年

11 「はかなくてとしふるゆきもいまみればありしひとにはおとらざりけり ままははのきたのかた みし人のくもとなりにしそらわけてふるゆきさへもめづらしきかな」『斎宮女御集』四五・四六、『源順集』の「世の中を何にたとへん」の一連の歌群中「世の中を何にたとへん冬を浅みふるとはみれどけぬる白雪」（一一八）。

12 田村俊介氏「雪と月」総角巻末薫独詠連作段落の再評価」『国語国文』五七・七（六四七号）。氏は論の中で、同様の指摘を試みておられ、この問いに対し、朝顔巻の源氏の言を引き、「冬の夜の澄んだ月に光り合う雪の山々こそ、宇治十帖の作者が他の場面で出し惜しんでこの場面のために取って置いた最高の自然美」と結論づけられている。

13 三木雅博氏「冬夜の詠—平安詩歌における「夜」の展開と貫之—」『和漢比較文学叢書第三巻 中古文学と漢文学』汲古書院 一九八六年

14 近藤みゆき氏「平安中期河原院文化圏に関する一考察—曾祢好忠・惠慶・源道済の漢詩文受容を中心に—」千葉大教育学部研究A 一九八九年 丹羽博之「月氷放—影見し水ぞまづ氷ける」の展開—」『古今和歌集連環』和泉書院一九八九年

15 「朝顔」巻四九〇ページ。

16 森岡常夫氏「源氏物語の雪」『源氏物語の考究』風間書房一九八三年

17 三苦浩輔「源氏物語の雪、絶望と滅びの徴し」『源氏物語の伝承と創造』おうふう 一九九五年

18 冬の詠歌としては『狭衣物語』巻二冒頭歌の狭衣の飛鳥井の女君への哀傷歌

たづぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露（巻二①p二五七）

19 林田孝和氏「源氏物語にみる雪の精神史」『源氏物語の精神史研究』桜楓社一九九三年

20 ただし、桐壺院、六条御息所、八の宮の哀悼の中心人物が庇護者を失った者で、今問題にしている大君哀悼の場面とは異なる。また、これらの例のいずれもが、死または哀悼の場面に雪の描写であり、大君のように死、哀悼の両場面においての共通の主題として用いられることはない。また、雪の哀傷歌の数少ない現存先行歌として先に述べた斎宮女御の歌がある。六条御息所、八の宮の哀傷歌はこの歌を踏まえたものかと思われるが、それについては今後の課題としたい。

21 巻七「とりべ野」①三三二。またこの箇所的一条天皇の歌は『後拾遺集』哀傷に収録される。

22 巻三十一「つるのはやし」③一六七。

23 『後拾遺和歌集』では、『法華経』「序品」を踏まえ初句を「薪尽き」とする。

24 北涼・曇無讖訳『大般涅槃経』「大正大藏経」巻十二 六〇八ページ。

25 巻三十一「つるのはやし」③一七一、頭注。

26 渡辺秀夫氏『平安朝文学と漢文世界』勉誠社一九九二年

27 加藤静子氏『王朝歴史物語の生成と方法』風間書房二〇〇三年。第五章「栄花物語」の表現性」一二四ページ。この中で、大江朝綱作「朱雀院周忌御願文」の例をあげられる。

28 劉宋・慧嚴等、『大般涅槃経』「南本涅槃経」ともいう。

29 巻三十一「つるのはやし」③一七一ページ。

30 藤壺の死は、「灯火などの消え入るやうにてはたまひぬれば、」が、『法華経』序品「仏此夜滅度、如薪尽火滅」をふまえる。石田穰二氏「源氏物語における四つの死—歌語のことなど—」『源氏物語論集』桜楓社 一九七一年、田中隆昭氏「源氏物語における死・葬送・服喪」『源氏物語の歴史と虚構』勉誠社 一九九四年

31 仏の涅槃を記した経典は数多く存するが、「雪山童子」、「鶴の林」の典拠となるのは注19・23の『大般涅槃経』の一部を引用したものである。この経典は、東晋・法顕『大般涅槃経』を素材として成立。さらに

その源流は『長阿含経』中の「遊行経」にもとめることができる。これらの仏典はすべて平安時代までには伝来しており、仏の最後の教えである『涅槃経』は重要な経典の一つであった。また、「遊行経」の現代語訳については、三枝充恵氏『ブツダの入滅』（青土社 二〇〇〇年）を参照した。

③ 『長阿含経』「遊行経」〔大蔵経〕卷一 二十四ページ〕「将諸家屬并持五百張白疊。持白疊出拘尸城」

④ 『長阿含経』「遊行経」〔大蔵経〕卷一 二十八ページ〕「汝欲葬我先以香湯洗浴。以五百張疊次如纏之。内身金棺。」

⑤ 白い衣は、単衣であるが、特にそのことを言及していることに注意したい。また白衣を着用したまま死に至る人物に、他には柏木の例をあげる事ができる。「白き衣ども、なつかしうなよよかなるをあまた重ねて、衾ひきかけて臥したまへり」（柏木）④三三四

⑥ 『大般涅槃経』（北本）「師子吼菩薩品」十一の四。